

ほっぺるランド渋谷(株式会社テノ.コーポレーション) 渋谷区

■ 基本情報

所在地	東京都渋谷区鶯谷町2-16
運営主体/種類	株式会社 テノ.コーポレーション/認可保育所
施設規模	●0歳児:9人 ●1歳児:15人 ●2歳児:16人 ●3歳児:16人 ●4歳児:17人 ●5歳児:17人
特色・理念・目標など	保護者の「仕事」と「育児」の両立を支援し、安全な環境の中で身体的・精神的発たちが得られる保育サービスを提供。 自然から心動かす経験を積み重ね、たくさん愛され、自分を大切に感じ、友だちと共に過ごす楽しさ・心地よさを感じて欲しいと願って保育をしている。
園の周辺環境	●渋谷駅から徒歩約6分の立地に、隣接する屋外遊戯スペースを併設。 ●徒歩2分の近隣公園のほか、少し足をのばせば広大な代々木公園がある。
取組クラス	3・4・5歳児クラスを対象に活動を実施

■ 事前打ち合わせ・導入研修での様子

渋谷駅にほど近いところに施設があり、天気の良い日は近隣の公園を活用しているとのこと。都内では比較的に自然が少ない立地ではあるが、その中で「子供たちがどう自然と関わり、乳幼児期をどう豊かに育つか」を考えたいと、子供主体の保育および自然を活用した保育に意欲的であった。3.4.5歳児異年齢児クラスでの参加で、一人ひとりの興味関心を大切にしつつ、異年齢だからこそその関わりや経験が持てるように考えていきたいという声があった。

また、クラスとしてのまとまりがなかなか持ちづらいという意見がある一方で、虫に興味強い3歳児の姿に他の年齢の子が関心を持つ姿があるという意見もあった。



導入研修



渋谷区立猿樂古代住居跡公園



鶯谷児童遊園地

活動同行1回目

2022年9月5日 10:00-11:20 [鶯谷児童遊園地]



コオロギ
いたよ~



降りる時のサポートが
怖かった

いつもは縄跳びなどの遊び道具を持っていく公園へ試しに何も持たずに行ってみることに。コオロギやバッタを捕まえたり、木登りや落ち葉遊び・鬼ごっこなどで、それぞれいつも仲の良い子供同士で遊んだり、保育者と一緒に遊びたがったりする姿が見られた。全体的にあちらこちらに移動しながら遊ぶ子供たちが多かった印象。

今まで登っていた高さ以上に登っていた子供がいた。周りの子供たちも応援し、盛り上がりつつも、サポートしていた保育者はどこで止めようか迷ったとのことだった。子供のチャレンジ心と安全にサポートできる範囲を考える機会となった。



落ち葉で
虫のお家づくり



自然物での遊び

後半になると、捕まえたバッタを逃がさないようにバッタのお家を作り、滑り台でバッタを歩かせたり、年長児を中心に年少児も一緒に試行錯誤しながら遊ぶ姿もあった。遊具を持っていかなくても自然物等で遊び始める子供の姿が多く見られた。

保育者が感じた子供たちの様子

虫を探しているときに、自分が先に見つけてしまっていたが、子供たちの行動をもう少し引き出した方がよかったと思う。

いつもは縄跳びをする公園だったが、今日は木登りに一生懸命で、いつも以上の高さまで登っていたことに驚いた。頑張った時の達成感や、降りるときに少し危ないと感じるところはあったが、地面に降りた時に周りが拍手したことで、満足感を感じていた。登った後に、安全に木から降りることを、どうやって伝えてサポートすれば良いのかを考える機会になった。



アドバイザーからの振り返りのポイント

- 子供たちのバッタの扱い方を見て、保育者にとっては生き物の命について考える機会となった。今回は十分な時間が取れなかったが、保育者に出てきた疑問を、保育の振り返りの中で話していくことが大切。ルール化するのではなく、考え続けていくことが必要。
- 子供たちが保育者を介して遊ぶ姿が多く見られた。子供同士がお互いに意識できるような投げかけや動機付けがあると、クラスがまとまってくるため、朝の会での簡単な動機付け(遊びへの見通しや期待感を高める話等)や活動後の子供たちとの振り返り(どんな遊びをした、何を発見したか等)を勧めた。

活動同行2回目

2022年9月21日10:00-11:20 [渋谷区立猿楽古代住居跡公園]



どんぐり等の木の
実を集めている姿



台風後でどんぐり等の木の実が
沢山落ちていた為、子供たちがす
ぐに気づき遊びが始まった。拾い
集めたどんぐり等の木の実に、お
店屋さんごっこやままごと遊びが
始まり、子供たちがそれぞれに好
きな遊びに夢中になっている姿
が印象的だった。

伸びて垂れ下がっていた藤棚の
ツルで遊び始めた子供たち。引っ張ったり、揺らしたりしているうちに
葉が落ちてしまった。それを見て保育者がツルよりも落ちた葉で遊ぶよ
うと促す。自然物の扱いについて保育者が考えた機会となった。

ツルを引っ張って
遊ぶ姿

雑草の背が高く伸びており、探検のように
草むらをかき分けて入るうちに、雑草を引っ
張るとすぐに抜けることに気づいた。自分た
ちよりも背の高い草を抜いて、自分と背比べ
したり、大人と比べたりと年長児は高さや
長さを体験していたことが印象的だった。また
縁石の周りを歩いて渡ったり、様々な地
形を身体を使って遊ぶことを楽しんでいる
子供たちの姿もあった。

前回よりも子供たちが自ら自然に関わって
いく姿が多く見られ、鬼ごっこで遊ぶ子は少
なかった。



自分よりも
背の高い雑草を
抜いて遊ぶ



草むらに入って
遊ぶ子供たち

保育者が感じた子供たちの様子

男の子たちが藤棚のツルにぶら
下がって遊び始めた時、自然との
つながりということでは良かった
と思う反面、葉っぱをちぎってしま
うことは、命あるものだからという
複雑な気持ち。どうやって伝えら
れればいいのかと思った。

雑草で遊んでいる時も、子供た
ちは抜いて面白そうに遊んでいた
が、雑草だから抜いてもいいと思
う一方で、抜くことへの懸念も感じ
子供たちにどのように伝えるべき
か迷った。

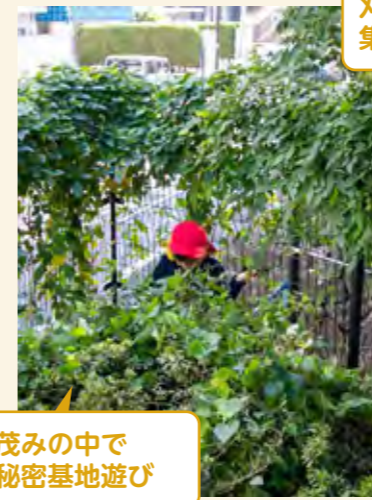


アドバイザーからの振り返りのポイント

- 保育者自身が季節の変化を感じていた様子だった。また、子供が自然物と関わることで、興味関心が広がり、遊びが生まれることを感じ、自然の中で過ごす有効性を感じていた。
- 草花の扱いに関する疑問や懸念が上がり、保育者間でも意見の相違があった。雑草ならば、子供たちの体験の機会として、多少抜いたり千切ったりすることも必要だと伝え、また、子供たちの扱いがひどい場合は、草花の命について子供たちと考える機会にしてもよいと伝えた。
- 普段の限られた職員数の中で、安全管理を十分にしながらも、子供たちの姿を理解し、保育を展開させていくためにどうするかの話合いを行った。安全管理(全体把握と連携)の方法を提案し、試行錯誤してみたいと伝えた。

活動同行3回目

10月27日10:00-11:30 [渋谷区立猿楽古代住居跡公園]



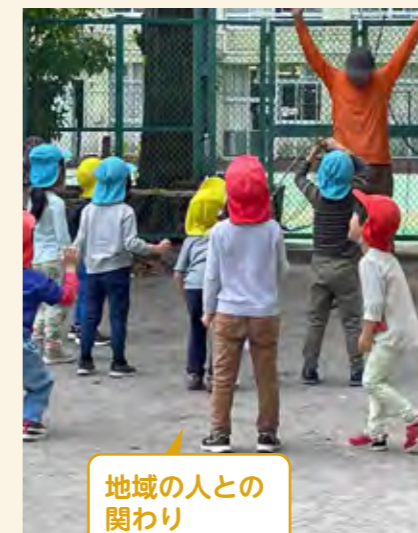
刈り取られた雑草を
集めて遊びが始まる姿



探検ごっこや枯れ草を集めて遊んだり
と、公園に着くとすぐに遊び始める子
供たちの姿が印象的だった。
公園の様子が季節を経て前回とは違
い、雑草が刈り取られていたり、前回な
かった木の実が落ちていたり、公園
の様子で子供たちの遊びにも変化が
あった。
草を面白がって集める姿が見られ、
ベットを作り、猫になったり、ごっこ遊
びを楽しんでいた。
子供たちの力で遊びを作り出すことが
できるようになったことが見てとれた。

茂みの中で
秘密基地遊び

毎日体操に来ているおじい
さんに子供たちが関心を示
していた。おじいさんに話し
かけ、一緒に体操を始めた姿
は、今までにない姿だったと
保育者も驚いていた。
前回の保育同行以降も公園
に通い、連続した遊びを行
い、自然に興味がない子へ
の保育者からの遊びの提案
でリース作りが盛り上がり、
この日も数名の子供がリー
スを作っていた。



地域の人との
関わり



ツルを取り、
ツルでリースを制作

保育者が感じた子供たちの様子

年少の子たちが集められた雑草をネコのベッド
に見立てたごっこ遊びを始めると年中の子供たち
も加わり、年少組と年中組の関わりが増えてきた。
どんぐりも無くなった季節だったため子供たちの
発想が広がり、いつもは見えないような遊びを始
めていた。

公園で体操をしていたおじいさんに話しかけ、
一緒に体操をする姿を初めて見た。今まで一度も
会話を交わしたことがなく、物おじすることなく話
しかける姿に成長を感じた。



アドバイザーからの振り返りのポイント

- 自然物だけでも子供たちが遊びを見つけ、遊ぶ姿に驚いたとのこと。道具は初めから出すというよりも、遊びがさらに広がるように利用することも大事であることを伝えた。
- 渋谷の中心地に所在する園だが、しっかりと体幹が育っており、自然の中で遊びを作り出す力も豊かに育っているように見えた。都心だからこそ、園外へ出て自然に触れる体験を保障することの大切さを確認した。

活動を振り返る

同行1回目

木登りをする子供たち
チャレンジしたい子が順番に登る。保育者がそばで安全管理をし、二股に分かれている太い枝まで登れる子はあまりいない様子。それぞれ自分ができるところまで登っていた。



虫に興味を持つ子供たち
保育者がバッタを捕まえて見せようと奮起する。年少の子供たちは興味があるが、なかなか捕まえない。



- 保育者から**
- 木登りについていて、登れなかったのが今日は登れたという達成感の表情が見られたのはよかったが、降りる時どう支えたらいいかわからなかった。
 - バッタで遊んでいる子に、どこまでさせるかの線引きが難しいと感じた。弱ってしまったり死んでしまったり、捕まえ方の力加減など、虫の命をどのように伝えればいいのか迷う。

同行2回目

子供の遊ぶ力・遊びを見つける力

久しぶりに訪れた公園ということもあり、保育者自身が季節の変化を感じていた様子だった。また、子供が自然物と関わることで、興味関心が広がり、遊びが生まれることを感じ、自然の中で過ごす有効性を感じていた。



安全管理は保育者で連携しながら全体を把握

子供と関わり遊びを展開する保育者と、子供の人数把握や全体確認をする保育者の役割が分担されている。役割分担も大事であるが、そのことで子供一人ひとりの全体性が見えづらくなっていることや、職員の負担が大きくなっている印象がある。担当が一人で全体すべてを把握し安全管理をするよりも、保育者で連携しながら全体を把握することで、心理的な余裕が生まれ、子供の遊びの連続性が理解・把握できる。



- 保育者から**
- 遊具を持参せずに、どんなふう遊ぶかを見守ったが、特に年長クラスが楽しそうだった。
 - 台風の後で、落ちているドングリも多く子供の関心を惹いた。ドングリを拾うだけでなく、友たちと一緒に遊びを広げていた。

同行3回目

地域のひととの交流

毎日本体操に来ているおじいちゃんのお真似をして、一緒に体操が始まった。毎日欠かさず来ているおじいちゃんだったが、(設立から)6年間で初めて交流が生まれた。物おじしない子供たちの姿に驚いた。



都心だからこそ、園外へ出て自然に触れる体験

よく園外へ散歩に出ているため、子供たちのそれぞれの興味を満たしながら過ごすことができている。自然の中で遊びを作り出す力も豊かに育っているように感じる。都心だからこそ、園外へ出て自然に触れる体験を保障して行くことの大切さを確認した。



- 保育者から**
- 草を面白がって集める子供姿。ベットを作り、猫になったり、ごっこ遊びになっていた。丈の長い雑草がなかなか抜けず、子供同士で手伝ってと言いつつ「うんとこしょ・どっこいしょ」と大きなかぶのような遊びに発展していた。
 - 安全管理の基準が名前と顔を確認するルールに変わった(渋谷区の指導)。安全管理をしながら子供をどう遊ばせるかを試行錯誤している。

活動のまとめ

担当アドバイザーより取り組みの特徴と意図 ▶担当:久保田修平



- 遊具を持参しないで、子供たちがその場で遊びを見つけて遊ぶようにする
- 保育者同士で連携し合い、子供の姿や声を把握できるようにする

▶活動を通しての子供と保育者の変化

- 子供が公園の自然物を活用して遊ぼうとする姿があった。また、保育者もその姿を大切にしようとしていたり、さらに遊びが広がるように声をかけていた。
- 保育者が、子供が自ら遊びを見つけて遊び始めることに気づき、子供の姿や声を大切にしようとしていた。
- 子供の興味関心や意欲に寄り添い、見守ろうとする姿があった。一方で、どこまで認め見守っていったらいいかに疑問を感じる時もあった。
- 1名の保育者が子供全員を把握するのではなく、保育者同士が連携を行うことで、子供たちの把握が出来るようにしようとしていた。また、そのことで保育者のゆとりが生まれ、さらに子供たちの姿や声を捉えられるようになっていた。
- 振り返りを行うことで、保育者同士の想いや考えを共有し、そして次の保育にどう展開させていくか考える姿があった。

アドバイザー総括

子供の安全管理は重要であるが、それと共に子供たちの姿や声を十分に捉えられ、そこから保育を考えられるよう振り返りなどを通して、一緒により良い保育を考えていきました。

ました。

子供たちが安心して安全な場で活動できるように心がける一方で、保育者がゆとりを持って関わられるように保育者間の連携やコミュニケーションへの工夫を考えていきました。



普段から近隣の公園を利用する一方で、固定遊具や持参した遊具の利用が多くなっていたことから、固定遊具の利用よりも自然環境の多い公園を選んだり、遊具を持参せず、自然環境に身を置ける状況を作っていました。保育者は子供たちの興味関心を大切にすると共に、子供たちに新しい視点や気づきを持つようなきっかけを作ったことで、それらから、子供たちは自ずと自然物に興味関心を広げると共に、より主体的に活動し探求する姿がありました。また、その姿を保育者は感じ、子供たちの遊ぶ力などに気づき、より見守り、子供たちの姿から保育を考えようとする気づきになってい

ました。その為に、振り返りを行い、保育者間の共通理解やそれぞれが持つ視点を知るきっかけになるように取り組み、保育者同士の視点の違いに気づき、子供たちの姿をより多角的に捉えられるようにしました。その上で、どう保育を展開させていくか考える機会になりました。

今後も、安全管理を十分に担保しながらも、ゆとりを持ち、子供の姿から保育が展開されることを期待しています。

にじいる保育園石神井町(ライクキッズ株式会社) 練馬区

■ 基本情報

所在地	東京都練馬区石神井町8-22-14
運営主体/種類	ライクキッズ株式会社/認可保育所
施設規模	●0歳児:6人 ●1歳児:10人 ●2歳児:10人 ●3歳児:15人 ●4歳児:15人 ●5歳児:15人
特色・理念・目標など	【子供理念】 ~のびやかに育て だいちの芽~ ■自然を愛し、心身共に健やかな子供 ■自分で考え行動し意欲と根気のある子供 ■仲間と関わり人を思いやれる子供 ■自己を表現できる子供
園の周辺環境	●住宅街の中に立地する保育園。 ●徒近隣の公園の他、池や林などの武蔵野の自然が残る都立石神井公園が立地。
取組クラス	5歳児クラスを対象に活動を実施

■ 事前打ち合わせ・導入研修での様子

開園3年目。これまで子供主体の保育に取り組み、子供たちは自ら遊びを見つける力や解決する力があると話していた。本事業を通して「自らの保育の気づきやさらにより良く出来るヒントを学びたい」、また「雨の日の散歩」や「自然の中でどんなことが出来るか」などの発

言があり、意欲的に本事業に臨んでいる姿勢がうかがえた。広場のある公園では、運動が多いとのこと(ドッジボール・かけっこ等)だった。職員の振り返りをする時間が限られるので、振り返りや会議の持ち方について知りたいという意見もあった。



保育者と子供たちの遊びの振り返り



石神井公園

活動同行1回目

2022年9月7日 9:45-11:45 [石神井公園]

事前に期待感を膨らませていた子供たちは、当日、自分たちで工作のお弁当を持参し、お弁当を食べる真似をして、嬉しそうであった。久しぶりに遠出したことで、特別感のある活動となったことがうかがえた。

工作したお弁当
いただきます!



ハチがいる!



少し前の散歩時に蜂でパニックになったとのこと。事前に蜂がいた時の心構えを伝えると、冷静に対処することができた。保育者も冷静だったため、蜂を刺激することなく、観察しながら退避した。

虫かごを囲む
子供たち



保育者が持参した様々なもの(工作の道具・ビニール袋・虫かご・虫あみ・虫メガネ等)を使って遊びを始めた子供たち。移動しながら様々な虫、きのこ、どんぐり等自然物を発見し、個々の興味を広げている姿が見られた。「せんせい、みて〜」と保育者に声をかけに行く子供が多いたことが印象的であった。

たくさんのどんぐり
を拾い集める



保育者が感じた子供たちの様子

子供たちがやりたいことをのびのびとできていたことで、見守る自分も楽しかった。

通りかかった人が、カブトムシがいると教えてくれたことから、子供たちも虫への興味が向いた。まさかカブトシを捕まえられるとは思っていなかったが、飛んできたチョウを捕まえたり、自然との関わりが持てたと思う。

行く前は興味がどこに向くのか予想がつかなかったため、工作の道具をたくさん持って行ったが、子供たち自身がいろいろ発見していた。持って行きすぎたと思うが、今日のことは次に活かせる。



アドバイザーからの振り返りのポイント

- 「最高でした」という保育者の感想があったように、保育者自身も主体的に楽しむことで、子供たちも興味関心を広げたり、楽しむ雰囲気生まれ、よい影響があった。
- 子供たち自身が関心を示す度に、保育者は耳を傾け、一緒に観察したり探そうと寄り添っていた姿が見られ、そうした関わりが大切。
- 様々な道具を持参し、様々な活動が増えた一方で、遊びが分散してしまっているようにも感じた。主になる活動を絞つつ、状況によって遊びを広げられるようにすることも大切である。

活動同行2回目

2022年9月30日 19:30-11:50 [石神井公園]

虫眼鏡で観察



アゲハの幼虫がいるよ



クモの巣に興味を持つ姿



畑で何を作ってるのかな?



小さな自然物を自ら見つけて、保育者から虫眼鏡を受け取って観察をする子供たち。虫眼鏡は使いたい時にいつでも出せるようにしていた。保育者が子供の気づきや発見に共感しながら、応答することで他の子供へと伝わっていく様子が見られた。前回よりも子供同士の関わりが増えていた。子供たちのつぶやきや気づきに寄り添う保育者のあり方が穏やかで楽しい雰囲気を作り出していた。

散歩の道中も自然物を見つけるとみんなで立ち止まって観察してから進む、道草も楽しむ散歩の仕方が印象的だった。子供たちも満足がありながら、無理なく歩く姿があった。帰りも焦らず道草しながらも、急ぐ所や危険箇所ではピリッとした声のトーンで雰囲気の違いを伝える保育者の姿があった。

保育者が感じた子供たちの様子

今日は自然の中で遊びを一から作り出すことを狙いに考えた。バッタを見つけた子が、バッタがいるというつぶやきが子供たちの間に広がり、協力し工夫する姿があった。ドングリがたくさん落ちている場所では、ドングリ投げをしたいと言い出した子が、ほかの子たちが虫を捕まえている様子を見て、自分がやりたいことがあってもみんなが虫を捕まえているからと、仲間を気遣っていた。

前は遊んで楽しかったが、今日は子供たちのあたたかな姿に満足を感じた。



アドバイザーからの振り返りのポイント

- 公園へ向かう道中も、保育者が安全に留意し、時間的にも余裕を持ちながら、その場での子供の発見や気づきに寄り添い、子供たちの興味を広げることができていた。
- 保育者の発言が、子供からの発言に対して共感するものが多く、声の大きさや伝え方が、分かりやすく丁寧で、つぶやくようなトーンが印象的だった。そのことにより子供たち自身で考える姿や自ら聞こうという姿が生まれ、子供たち同士の発言や繋がりも生まれやすくなっていった点が良かった。
- 広場で過ごしていた時、保育者同士が声を掛け合いながら連携しあっていた。そうすることで、全体の把握をしつつ、それぞれが十分に子供に寄り添うことが出来ていた。

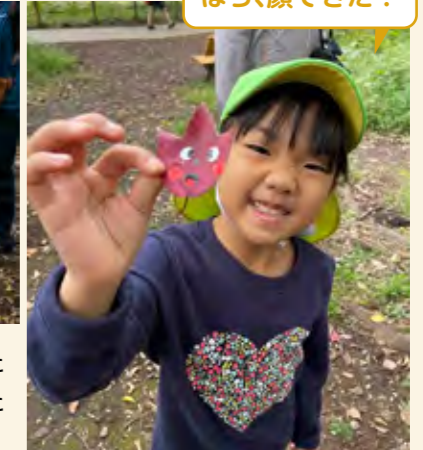
活動同行3回目

2022年11月1日 9:45-11:45 [石神井公園]

クルクル回ってるよ



ほら、顔できた!



散歩中の近隣の方から紅葉の種をプロペラのように飛ばす方法を教えてもらい、遊びが始まる子供たちだった。当初、違う場所で活動をする計画だったが、その場所で遊ぶことになった。子供同士で遊びを展開し、それが他の子へも派生していた。いくつかの遊びが展開されていたが、それぞれが独立した遊びではなく、緩やかにつながり合い、子供たちが自由に行き来できるような遊びが展開されていた。

うんとこしょどっこいしょ



根っこがある!



モグラの穴を掘っていた子が根っこを見つけた。お芋掘りの経験が思い起こされたようで、数人の子供たちがみんなで引っ張り始めた。「うんとこしょ・どっこいしょ」と保育者と一緒に楽しむ姿もあった。根っこを抜きたいという数人の子の思いに、沢山の子供たちが関わり、入れ替わり立ち替わり常に5~6人で色々な案を出しながら試行錯誤し、協同する姿が見られた。

保育者が感じた子供たちの様子

遊びを作り出し、考える力が育めたらと思って公園に出かけた。予定していた場所と違う広場で遊び始め、何もなくて遊びを作り出す子供たちの強さを感じた。モグラの穴を掘り始め、出てきた木の根を抜くために、子供たちが役割分担をし始めたので、どうなるかと思いつき見守った。凸凹した起伏のある場所では安全面に気を配ったが、それ以外の場所では、子供たちの遊ぶ様子に任せ、子供たちにとっても充実した時間になったと思う。



アドバイザーからの振り返りのポイント

- 一人の遊びが、他の子にも繋がり、みんなでの遊びに変化していった。それを保育者は見守りながら、ときに共有する姿が見られた(種飛ばし、根っこ掘りなど)子供の主体性を大切にし、信じながら待ち、見守る姿があった。
- 子供たちの日頃の姿や興味関心を、フリーの保育者も理解していた。普段から情報共有をしている姿が伺えた。保育者間の連携および共通認識の大切を再確認した。

活動を振り返る

同行1回目

お弁当遊びをする子供たち

それぞれが自分で作りたいお弁当を考えて作り、本物さながらだった。保育者は子供が欲しいという材料(紙粘土・色紙・毛糸など)を用意したとのこと。今日の導入として行ったとのこと。



落ち葉で工作

導入研修の時に、ヒントとして工作の道具を持っていくことも有効と話した為、持ってきてみたとのこと。工作好きな子供たちが自然物と組み合わせで作っていた。



- 保育者から**
- 「楽しい楽しい」を連呼していた子供たち。子供たちは発見することに夢中になって楽しんでた。キノコ、落ち葉、ドングリなど、見つけてきたものを園内での活動にどう活かすかを考えたい。
 - 外で工作をする機会が初めてだった。作る楽しさが広がったかもしれないけれど、用意しすぎたかな。あそこでしかできない遊びもできたかも。興味が広がりました。

同行2回目

五感を使って遊ぶ

子供たちがにおいや手の感触、気づきなど五感を使っていることを感じた。転んだ時に何につまずいたんだろう？根っこがあった、葉の下には虫がいるかも…と興味が広がっていた。



発見したものをみんなで共有

子供たちが自分で発見したものをみんなの分も見つけたい、共有したいという気持ちがみられた。



- 保育者から**
- ゲームの話ばかりの子が図鑑に興味をもち、そこから虫に興味に向いていた。
 - 自分の発見を共有する姿とか協調とかが見えて、温かさや成長を感じられて感動した。
 - アゲハを触ってツノが出てきて驚いた姿があって、実際に体験したのがよかった。
 - 公園への移動中、園への帰り道の途中、何かを見つけては立ち止まる子供たち。寄り道の楽しさを感じた。

同行3回目

子供たちの遊びを見つける力

一人の遊びが他の子にも繋がり、みんなでの遊びに変化していった。それを保育者は見守りながら、ときに共有する姿が見られた。



遊びの場所を興味にあわせ柔軟に変更

保育者が想定していなかった場所で遊び始め、何もなかったところでも遊びを作り出す様子があった。タイミングを見て移動しようと思ったが、そのままでもよく遊んでいたから移動しなかった。



- 保育者から**
- 根っこ掘りで、みんなで引っ張っても抜けなかった根っこを一人の子が引っ張ったら抜けた。そのことが嬉しくて、いろんな人(保育者や撮影隊の大人たち、友だち)に話して回る姿があった。
 - もぐらの穴を掘っていったら石や根っこが出てきた。根っこを引っ張り「うんとこしょ、どっこいしょ」が始まった。その遊びを共有しながら仲間を増やし役割分担、組織化していく様子が見られた。ある程度子供に任せて、安全面を見ながら見守った。
 - 大人が感じないような、子供たちならではの気づきや探究心が見られた。
 - 想定外の場所での遊びで、紅葉の種の大きさの違いや葉っぱの茎のつき方から物の仕組みに気づいた姿が見られた。探究心が発揮されていた。

活動のまとめ

担当アドバイザーより取り組みの特徴と意図 ▶担当:久保田修平



- 子供たちの姿や声から保育を展開する
- 近隣の大きな公園へ繰り返し訪れる
- 道具などを持参しないで子供たちが自ら遊びを見つけ遊べるようにする

▶活動を通しての子供と保育者の変化

- 子供たちは保育者に見つけたものを伝えにいき、保育者は子供の声をよく聴き、他の子も気づけるよう配慮していた姿があった。
- 子供たち同士が繋がり合い、クラス全体で共有したり、共に行動する姿があった。
- 保育者が楽しみ、リラックスして保育をしていた。また、ゆとりを持って子供たちと関わる姿が見られた。
- 子供たちの姿や声から、本来の計画を変更し、柔軟に対応していた。
- 保育者同士が声を掛け合い、連携・共通認識を持っていた。
- 保育者同士で、保育計画の共通理解や散歩時の留意点などの共通理解がされていた。
- 保育者の興味関心から子供も興味を持っていた。
- 振り返りの場が、反省会ではなく、より良くするための前向きな振り返りの時間になっていた。
- 散歩で公園に行くまでの道中、子供たちの興味関心を十分に探求できるようにしていた。また保育者から知らせたり、気が付けるように促していた。

アドバイザー総括

施設から徒歩30分程の大きな公園に繰り返し通うことで、子供たちは興味関心を広げながら遊び込み、友だち同士の繋がりを深めていました。また日頃の生活の繋がりがや保育の連続性も見られました。保育者が子供たちの姿や声を大切に、十分に捉えようとする姿が基盤となっていることが見受けられました。そのことで、子供たちは安心感や信頼感を持ち、自分の興味関心をさらに広げることができていました。子供たちの気づきや発見を、他の子たちにも共有することで、クラス全体で共通理解できるように関わっている姿もありました。保育者は日々の子供の姿から考えた保育計画を大切にしながらも、その時々の子供たちの姿や興味関心に柔軟に合わせ、子供たちがより探求出来るように変更や工夫をしているようでした。

切にしつつ、リラックスして楽しむことで、保育者も主体的に行動できていたように思います。それが子供たちの主体性にもつながっていることが見えました。保育者同士の日頃からのコミュニケーションや声の掛け合いなどから生まれる、丁寧な安全管理が下支えになっていたように思います。

保育後の振り返りでは、保育者同士でざっくばらんに行っていましたが、そのことで、共通理解や気づかなかった視点や子供の姿、次への計画や疑問・課題への検討ができ、それが次の保育へと繋がっていたことが印象的でした。

他にも、保育者自身が自分の興味関心を大



ポピンズナーサリースクール一之江(株式会社ポピンズエデュケア) 江戸川区

■ 基本情報

所在地	東京都江戸川区一之江8-14-1 交通会館一之江ビル4F
運営主体/種類	株式会社ポピンズエデュケア/認証保育所
施設規模	●0歳児:6人 ●1歳児:9人 ●2歳児:10人 ●3歳児:4人 ●4歳児:7人 ●5歳児:4人
特色・理念・目標など	ポピンズ独自の教育(エデュケーション)と保育(ケア)を融合させた「エデュケア」により寛容な人間、聡明で愛情深い人間、探求心の旺盛な人間、グローバル社会で活躍できる人間をめざして、のびのび明るく一人一人の個性を生かした保育。
園の周辺環境	● 駅ビルの中に立地。 ● 近隣に公園が複数ある他、近くの川沿いに広い河川敷が広がる。
取組クラス	3・4・5歳児クラスを対象に活動を実施

■ 事前打ち合わせ・導入研修での様子

子供主体の保育を実践していこうと試行錯誤が始まっている様子だった。今年から工作が自由にできるようなコーナーを設け、使い方を理解するまで大変だったが落ち着いてきた。また3~5歳児の縦割り保育を行う上での苦労がある様子で、また安全管理についても

う少し余裕を持ちたいという意向もあった。雨天の散歩もしてもいいかもしれないという意見もあり、本事業を前向きに捉え、且つ期待感を持っている様子が見えかけた。



導入研修



駅ビルの中にある園から公園に向かう



一之江ひだまり公園

活動同行1回目

2022年9月22日 9:50-11:20 [一之江三丁目南公園]

足をここに置いてごらん



自分でできた!



どんぐりが落ちていた公園を選び、季節を感じることをねらいに公園へ出かけた。どんぐりを集める子、遊具で遊ぶ子や鬼ごっこをする子供が多かった。登り棒のような固定遊具を保育者に教えてもらいながら登る一方で、自分で登れたことを喜び達成感を感じているような姿の子供たちがいた。

夢中になって
バッタを捕まえる姿



虫に思わず触れる姿

保育者がヤモリの餌にするクモを捕まえようと一生懸命になっていると、虫が苦手だった子供も一緒に探し始めた。苦手だったが、夢中になることで、思わず手がのび、捕まえるという場面があった。いつもとは違うその様子に保育者も驚き、当の子供自身も満足な様子が見られた。

保育者が感じた子供たちの様子

飼育しているヤモリの餌を探すことと、どんぐり拾いを目的にして散歩に出かけた。久しぶりに長い時間の散歩だったので、子供たちは朝から張り切った様子だった。前回、同じ公園に行った時には遊具の高さに怖さを感じていた子供が、今日はもう一度挑戦してみようと、一生懸命に登り棒を登っていた。

子供たちの間に恐竜ブームがあり、公園で遊んでいる時にも、いろいろな空想が生まれていた。



アドバイザーからの振り返りのポイント

- 久しぶりの公園での遊びだったこともあるのか、子供たちが全部やりたいという気持ちがあるように見えた。遊びが細切れでじっくり遊ぶ姿があまり見られなかった。週1程度通ってみることで子供自身で何があるかがわかり、子供の遊び方も落ち着いて、遊びを展開するようになるのでは。
- ヤモリの餌を捕まえていた先生の姿に子供が集まっていた。先生も本気で楽しむことで子供がその姿に惹かれる。

活動同行2回目

2022年10月3日 10:00-11:30 [一之江三丁目公園]

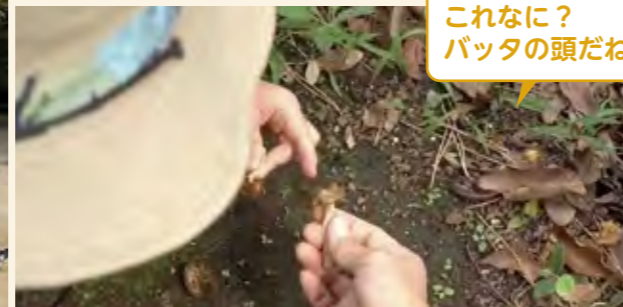
なんだろう？柿だ！



袋にたくさんのセミの抜け殻



これなに？
バッタの頭だね。



子供たちが柿の木を見つけ、匂いを嗅いだり、もっととろうと木の幹を押してみたりしていた。柿を見つけたことをきっかけに、ねらいだった秋の自然探しにつながったけれど、場所を移動したため、興味が途切れてしまった。場所を移動した後は、固定遊具で遊ぶ子が多く、数名は公園の植え込みでセミの抜け殻やキノコを集めたり、ヤモリの餌探しを手伝う姿が見られた。



お茶の時間ですよ～

水分補給の時間を決めて全員が同じタイミングで飲んでいる姿。こまめに促している様子であった。一口で飲み切るコップを渡し、全員が飲んでいることを確認しながら丁寧に対応していた。

保育者が感じた子供たちの様子

ほかの園と重なったため、予定とは別の公園になった。あまり行くことがない公園だったためか、キョロキョロと周りを気にかける様子があった。

今日の目的は秋の自然とヤモリの餌探しだったので、前回の振り返りからヤモリの餌を入れるための袋を持参。見つけたセミの抜け殻を集めている姿があった。普段は行かない公園だったこともあり、子供たちの多くが遊具に集まった。3歳児は遊具の経験が少なかったため、高さのある吊り橋を怖がっていたが、チャレンジする姿もあった。



アドバイザーからの振り返りのポイント

- 子供主体の保育を進めていく上で、普段の関わりでも意識してみてもいい？例えば、水分補給の促しは、「喉が乾いたら飲んでね」と子供が自ら「喉が渴いている」と気付けるようにしていったり、トイレ・水分補給・衣服の調節など自分の体の感覚を知り行動できるよう促すことも大切。
- 保育者が子供の問いに全て答える必要はなく、「なんだろうね～」「面白いね」と共感するだけでも大丈夫。さらに、子供自ら考えられるよう「どう思う？」「どうしたらいいかな？」と投げかけや言葉がけを意識することも大切。

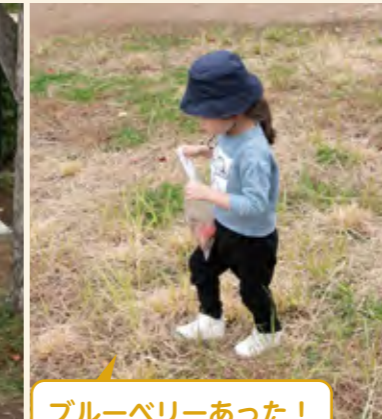
活動同行3回目

2022年10月28日 10:00-11:30 [一之江ひだまり公園]

いいにおいだね～



ブルーベリーあった！



自然豊かな公園へ出かけ、子供たちの自然への興味が広がった様子が印象的。カラメルの匂いがするカツラの落ち葉を拾っては嗅いで、葉によって匂うもの匂わないものがあることに気づいていた。落ち葉の色に気づき、自分が好きな色の葉を集めたり、木の実を見つけ「ブルーベリーあった」と喜んで袋に拾い集めたりしていた。

みて！とべるよ！



飛び降りられると嬉しそうに



岩の上によじ登ったり飛び降りたりして、力試しのような遊びが始まった。岩に触れた時に、岩が冷たいことに気づく子もいた。小川では、葉っぱを流して遊んだり、跳びこえたりしていた。以前来た時に、跳べずに靴を濡らしてしまった子も今回はできたと喜んでいただようだった。

保育者が感じた子供たちの様子

前半を遊具のあるエリア、後半は秋を探しに行こうをテーマに遊具のない広場と考えていたが、ほかの園と重なったため広場で遊んだ。

カラメルの匂いのするカツラの木の落ち葉が、子供たちにも初めての体験で、友達にも教える様子や、雑草の中に入り込んで転げ回り、全身を草だらけにして夢中で遊んでいた。

以前に年少児が小川を飛び越えられず落ちてしまったことがあり、今日は上のクラスの子に声をかけて、一緒に飛んでもらっていた。



アドバイザーからの振り返りのポイント

- 固定遊具や道具がなくても遊び込めた活動になった。自然遊びや野遊びは子供たちが自分で興味を広げられるので、遊びも広がっていく。
- 岩の上に登ることを止める保育者と岩の上に登ってジャンプをしている子供を見守る保育者がいた。さっきやっていたことを止められると子供も混乱する。保育者間で、保育後の振り返りを行うことで初めて「そうだったんだね」と子供の姿を理解することもある。子供への対応を統一するためというだけでなく、子供の育ちの現在地を共有する上でも、保育者間の日々のコミュニケーションは大切。

活動を振り返る

同行1回目

自分で登る達成感

登り棒の周りに螺旋状のものが付いている遊具で、先生方が手伝って「登らせてあげる」姿が多くあった。一方で、自分で登れた体験をして達成感を感じている子供もいた。



初めて

虫を捕まえた

園の中で見つけた「ヤモリ」を見つけ飼いが始めたが、餌として虫を食べる(肉食)ことが子供たちには驚きだった。その餌になる虫を捕まえることが、今日の目的の一つだったが、虫が苦手な子が初めて捕まえた。



- 保育者から**
- 長時間外に出られることが少なかったため、のびのびしていた。
 - 園の中で見つけた「ヤモリ」を飼いが始めたが、餌として虫を食べる(肉食)ことが子供たちには驚きだった。その餌になる虫を捕まえることが、今日の目的の一つだったが、虫が苦手な子が初めて捕まえた。
 - ひろってきたものを、園でのアトリエ活動の作品作りにつなげたい。

同行2回目

秋の自然を見つける

柿の実が落ちているのを子供が見つけ、匂いを嗅いだりしていた。ほとんどの子供たちが柿の木を見上げ、興味を持っていたが、そのまますぐに遊具のある方へ移動。



初めての遊具にチャレンジ

3歳児は吊り橋の経験が無いが、挑戦している姿も見られた。揺れて怖いと言っていた子がいたので、「やめてもいいんだよ」と声をかけた。保育者自身もやってみて怖さを共感できた。



- 保育者から**
- ヤモリの餌を探す目的で、前回の振り返りから虫かごを持参したが、行き先の公園が変わってしまい、目的が少し変わってしまった。
 - 3歳児は吊り橋の経験が無く、揺れて怖いと言っていた子がいた。「やめてもいいんだよ」と声をかけ、自分もやってみて怖さを共感できた。

同行3回目

子供たちは遊びを見つける

他園と重なったため、公園内の遊具の無い場所になったが、何も無いところでも遊びを作り出していた。

すぐに助けられる距離感で見守る

岩からのジャンプを止めている先生とさせている先生がいた。それほど高い岩ではないので、良いチャレンジの場所になっていたが、子供によってサポートが必要な時もある。近くに寄ってすぐに助けられる距離感で見守る。



- 保育者から**
- 他園と重なったため、公園内の遊具の無い場所になったが、何も無いところでも遊びを作り出していた。年長のクラスは、落ち葉など季節に対する興味を示していた。
 - あとで遊具の方に移動しようと思っていたが、その必要がなかった。
 - 秋を探しに行った。行きの道中では紅葉に気づかず歩いていたが、公園では興味を持っていた。3歳児が落ち葉集めに集中していた。

活動のまとめ

担当アドバイザーより取り組みの特徴と意図 ▶ 担当:野村直子



- 外遊びや散歩での実践による「子供主体の保育」を検討し、普段の保育にも活かせるようにすること
- 園庭がないからこそ、近隣の公園の有効活用

▶ 活動を通しての子供と保育者の変化

- 保育者の視点が「教える」から「子供自身で考えられるように」と変化。「教える」が悪いわけではないが、必ずしも「教えてあげなければ」にならなくてもよいということを伝えた
- 知識を知らないといけないと思っていたが、子供と一緒に疑問を持ち、調べたかったら調べるなど、知識がなくても自然の中で過ごすことはできると、保育者の自然に対する捉え方に変化があった。
- 安全管理でガチガチになりがちだったとのことだったが、子供が遊びの中で挑戦する姿を安全に見守る姿勢が見られるようになった。
- 普段の室内活動では目立たない子供が、虫好きだったり、自然の中でイメージを広げて遊んだり、外遊びで光る姿がみられたとのこと。

アドバイザー総括

公園選びは「どんな固定遊具があるか」ということが多いと思います。しかし「自然」はどの公園にでも存在します。子供たちは自然を感じ、様々なことに気づいています。その子供たちの気づきや興味が広がるのは、保育者とその子供たちの姿に気づき、一緒に楽しむことがポイントとなります。今回の先生方は、「ヤモリを飼う」ということになり、先生方自身で試行錯誤しながら取り組み始めました。そしてこの活動で、体験的に自然遊びを知り、楽しんでいただけたのではないかと思います。

保育者も本気になる姿・楽しむ姿が子供の心を動かすということが見てとれた活動でした。都市部の子供たちは様々な地形の中で遊ぶ体験があまりありませんので、意図的に自然の地形が残っている公園を選ぶことも大切だと考えています。そのような観点から公園や近隣の環境を選択・利用すると良いと思います。また、自然の中で子供たちの発見に共感する姿というこ

とは、「何かをさせる」ことよりも、保育者自身が楽しく、子供たちの新しい一面を発見することにつながります。保育者が保育活動を考える際に「子供のつぶやき」や興味から考えることで、子供たちが主体的に活動し始めると考えています。

